京都大学教育研究振興財団助成事業
成　果　報　告　書

平成28年9月10日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会 長　辻　井　昭　雄　様

所属部局・研究科　文学研究科
職 名・学 年　博士後期課程3年
氏　　名　田 中 悠 子

助成の種類	**平成27年度 ・ 若手研究者在外研究支援 ・ 在外研究長期助成**	
研究課題名	初期イスラーム時代における「異文化」との接触:「異端」及び「異端言説」を巡る文献学的研究	
受入機関	ロンドン大学東洋アフリカ研究学院	
渡航期間	平成27年8月20日　～　平成28年9月10日（継続中）	
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料　■ 有（学会に関する資料）	
会計報告	交付を受けた助成金額	3,000,000円
	使用した助成金額	3,000,000円
	返納すべき助成金額	0円
	助成金の使途内訳	査証申請料　168,400円
		渡航費・滞在費　2,831,600円
当財団の助成について	（今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。） 助成金交付までの流れがスムーズかつ一括交付だったので、先の見通しが立てやすく、留学先で経済的な不安を感じることなく研究に専念することができました。大変助かりました。	

成果の概要／田中悠子

平成 27 年度在外研究長期助成

京都大学大学院文学研究科
歴史文化学専攻　西南アジア史学専修
博士課程　田 中　悠 子

報告者は、京都大学教育研究振興財団より平成 27 年度在外研究長期助成金の交付を受け、ロンドン大学東洋アフリカ研究学院において一年間の在外研究を行ってきた。その研究生活の概要と得られた成果をここに報告する。報告者の研究は「初期イスラーム時代における『異文化』との接触：『異端』及び『異端言説』を巡る文献学的研究」というテーマに基づいており、その研究目的は、「異文化」や「異端」といった言説やイメージが初期イスラームの思想や社会にいかに影響を及ぼしたのか、アッバース朝初期の異端をめぐる言説がいかに後世の史料において形成されてきたかを再検討するものである。

*****

報告者は平成 27 年度 8 月 20 日にイギリスに入国し、一か月の間、大英図書館および学院図書館所蔵史料の調査を行った。この史料調査の結果、ロンドンにおいてアクセス可能な史料の全容を把握することができたとともに、特に自身の研究によく用いるものについては複写を入手することができた。9 月 11～13 日にはオックスフォード大学を訪問し、同大学のボードリアン図書館所蔵のアラビア語写本の調査を行い、必要なものについては撮影を行った。以上の一連の史料調査により、一年間在外研究を行っていく上での基礎となる史料を入手し、研究環境を整えることができた。

9 月 21 日からは、ロンドン大学東洋アフリカ研究学院（SOAS）に Visiting Research Student という身分で在籍し、受入研究者であるヒュー・ケネディ Hugh Kennedy 教授に指導教官になっていただいて研究を行った。ケネディ教授が担当する古典アラビア語講読演習の他、初期イスラーム哲学、前イスラーム時代のイラン宗教を扱う授業を聴講し、自らの研究の基礎となる知識を深めた。これらの授業内容は日本の大学では専門的に扱われることが極めて少ないものである。SOAS では各分野研究の最先端を担う研究者がこうした授業を担当している上、学生たちにもイスラーム教徒・ゾロアスター教徒といった多様な文化的背景があり、イスラーム史や神学・哲学について、日本の研究動向では注目されていない観点が授業で提示されることもしばしばであった。こうした授業に出席することにより、日本では得ることのなかったより広い視野を開くことができた。

上記授業の聴講と平行して、研究計画に基づく報告者自身の研究をすすめた。9 月末から 10 月はじめにかけて、まず一年間で仕上げるべき文章（博士論文の一部を構成する）の骨子をまとめ、指導教官の添削を受けた後、具体的な内容の執筆にとりかかった。10～11 月にかけては、歴史史料 *Tārīkh al-Ya'qūbī* by al-Ya'qūbī、*Tārīkh al-rusul wa-al-mulūk* by al-Ṭabarī、*Murūj al-dhahab wa-ma'ādin al-jawāhir* by al-Mas'ūdī、*Tārīkh-i Bal'amī: Tarjumah-'i Tārīkh-i Ṭabarī* by Bal'amī (Persian)、*al-Jalīṣ al-sālīḥ al-kāfī, wa-al-anīs al-nāsiḥ al-shāfī* by al-Nahrawānī　の分析を行い、アッバース朝初期カリフによる異端政策が後世の各時代・地域において編纂された史料の中でどのように言説化し、その言説がどのように展開していくかの分析を行い、博論原稿にまとめた。原稿は英語で執筆し、2 週間に一度ケネディ教授と面談を行ってコメントを受け、随時修正を加えた。

12 月 3～5 日には、ケネディ教授が遂行している中世イスラーム世界の経済・交易研究プロジェクトが主催するカンファレンス 'The Geography and Infrastructure of Trade (800-1000 CE)' に出席した（添付資料 1）。本学会では、報告者自身の研究対象でもあるアッバース朝期の経済・交易の実態について、貨幣やガラスなどの考古学調査での出土品や、衛星画像を用いてアッバース朝初期の水路を再現する研究に基づく研究成果が報告された。報告者が従来行っている文献学的アプローチ以外の観点から再現された同時代の社会状況について知見を得られたことにより、自身の研究をより多角的な視点から捉えることが可能になったと感じられた。

12 月 20～22 日にはオランダのライデン大学に赴き、同大学図書館所蔵のアラビア語写本の調査を行い、自身の研究分野に関連するものについては撮影を行った。

2016 年年初からの第二学期からは、SOAS で開講されているシリア語講読の授業の聴講を開始した。報告者の研究対象である 8～10 世紀には、ビザンツ帝国とアッバース朝の境界域に居住するキリスト教徒知識人によるシリア語年代記が多く記された。これらの史料はムスリムが記したアラビア語での記録とは別の視点で同時代を語るものであり、アラビア語史料と対照してシリア語史料を使うことはより詳細な史実を明らかにする上で重要である。しかし日本ではシリア語の授業を開講している大学は極めて少なく、特に関西圏でシリア語習得の機会を見つけることは極めて困難であった。SOAS においてシリア語文法と歴史史料解読の基礎を学習する機会に恵まれたことにより、今後報告者自身の研究においてシリア語史料をより積極的に用いることが可能となった。

5 月末には、先学期から継続していた博士論文の第一部を形成する史料分析を完了し、指導教官の添削を受けながら引き続き執筆作業を行った。この執筆作業と並行して、後述する国際学会 Leeds Medieval Congress (LMC) での研究報告に向け、発表準備を進めた。

7 月 3～7 日には、リーズ大学で行われた国際学会 LMC に参加した（添付資料 2）。本学会は全歴史分野のうち中世史全般を扱う大規模なものであり、報告者は主にイスラーム地域の報告が集まる部会に参加して知見を広めるとともに、全世界から集まった研究者との

交流を通じて、人的繋がりを得ることができた。最終日の 7 日には『過剰の祝宴？ - 宮廷・消費・権威をめぐる越文化的観点 Celebrating Excess? Cross-Cultural Perspectives on Court, Consumption and Authority』と題されるパネルにおいて、報告者自身も『アッバース朝初期宮廷における宴会―君主の祝宴を主宰すること― The Caliphs' Feast in the Early Abbasid Court: Being a Host of the Loyal Banquet』という題目で研究報告を行った（添付資料 3, 4）。学会全体のテーマは「食」であり、報告者の発表は、アッバース朝宮廷における君主主催の祝宴に対して後世の史料においてどのような概念的意味が付与されていくかを検証するものであった（発表に用いたスライドを添付資料 5 として添付した）。本発表は、後世の人々から「黄金時代」と見なされるアッバース朝をめぐる言説がどのように形成されていくかという、報告者の博士論文における関心にも関わるものであった。本長期在外研究の成果の一部を大規模な国際学会において発表し、質疑応答や学会中の交流を通じて全世界の関連研究者に報告者の研究内容を知ってもらうことができたことは、本在外研究の大きな成果である。今後研究を続けていく上でも大きなアドバンテージになったと考えている。

報告者は貴財団の助成により、以上のような一年間の長期在外研究を行った。日本国内においては得ることのできなかった様々な知見を得る機会を得、また欧州の長い研究史によって培われた豊富な蔵書を調査し、全世界の研究者との交流も行うことができたという意味で、以上の在外研究は報告者の研究に極めて大きく資するものであったと考える。